

第81回 憲法を考える映画の会 憲法映画祭2025

手元資料

- 日時 2025年4月29日（火・休）10時～19時
- 会場 武蔵野公会堂ホール（吉祥寺駅南口）

■当日のプログラム

4月29日（月・休）

- 10:00 開場
- 10:20 開会
- 10:30 映画「禁じられた遊び」（87分）
- 12:00 食事休憩
- 13:00 映画「ベアテの贈りもの」（92分）
- 15:00 映画「オン・ザ・ロード
— 不屈の男 金大中 —」（129分）
- 17:20 映画「夢みる校長先生」（82分）
- 18:50 閉会挨拶
- 19:30 閉場予定

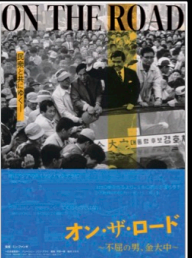
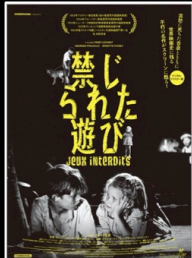
■手元資料 目次

- 資料① 憲法映画祭と憲法を考える映画の会について P.2
- 資料② 映画『禁じられた遊び』について P.3
- 資料③ 映画『ベアテの贈りもの』について P.4
- 資料④ 映画『オン・ザ・ロード— 不屈の男 金大中 —』について P.5
- 資料⑤ 金大中と韓国民主化の略年表 P.6
- 資料⑥ 映画『夢みる校長先生』について P.7
- 資料⑦ 第80回憲法を考える映画の会（2025/3/20）『ガザからの報告』参加者感想から P.8～P.9
- 資料⑧ 憲法を考える映画の会（関連映画会）上映作品一覧 P.10～P.11
- 資料⑨ 憲法を考える映画の会の活動 P.12
- 資料⑩ これからの憲法を考える映画の会（あとおいニュース 50号） P.12

憲法映画祭2025

4月29日（火・休）10:30～19:00 武蔵野公会堂

* 参加費：1日券 一般2500円（若者1500円）1回券 一般1000円（若者500円）
（予約・前売りは行っていない。直接、会場においで下さい）





『禁じられた遊び』
『ベアテの贈りもの』
『オン・ザ・ロード』
— 不屈の男、金大中 —
『夢みる校長先生』

4月29日 10:00 開場 10:20 開会
10:30～12:00 映画「禁じられた遊び」
12:00 食事休憩
13:00～14:40 映画「ベアテの贈りもの」
15:00～17:10 映画「オン・ザ・ロード — 不屈の男 金大中 —」
17:20～18:50 映画「夢みる校長先生」

会場：武蔵野公会堂ホール
武蔵野市吉祥寺南町1-6-22
TEL：0422-46-5121



主催：憲法を考える映画の会



憲法を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
ホームページ：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com

資料① 憲法映画祭と憲法を考える映画の会について

【憲法映画祭2025】

今年で憲法映画祭は9回目になります。
これまで「憲法映画祭」では、毎年、自分たちなりのテーマを決めて上映作品を選んできました。
その多くは、戦争について考える映画でした。

今年のプログラムでは、その「戦争」について考える映画に加えて、日本国憲法の三つの基本原則について考えていく映画を選びました。私たちが小学校や中学校の時に学んだ「戦争の放棄」「基本的人権」「民主主義（主権在民）」の三原則です。
そして、そうした憲法の基本を実現させるものとして「教育」について考えたいと思います。

『禁じられた遊び』・・・・・・戦争の放棄を考える

私は小学校の時に、この映画を見ました。戦争のことを、自分たちのこととして考えたのは初めての映画でした。

子どもの頃、この映画を見た人はその頃の自分の気持ちを思い返し、またはじめてこの映画を見る人は、あらためて戦争と自分たちについて考えることができたと思います。

『ベアテの贈りもの』・・・・・・基本的人権を考える

ベアテ・シロタ・ゴードン。憲法の起草に直接関わった人から憲法の成立過程と憲法に込めた思いを聞くことができる貴重な証言です。男女平等をはじめとする基本的人権の条文がどんな思いで作られていったかがベアテさんの物静かな言葉で話されていきます。

『オン・ザ・ロード 不屈の男 金大中』・民主主義を考える

韓国の政治家である金大中（キム・デジュン）の前半生を描いた映画ですが、同時に、韓国の近代史、民主化運動の歴史を知ることができます。

国民主権、民主主義を実現していくと言うことはどういうことか、この映画を通して考えることができます。

『夢みる校長先生』・・・・・・教育を考える

そして「教育」。ここでは公立学校の校長先生がどのように「自由」「民主主義」な学校を創りだす努力を続けているかが描かれています。規制が厳しいと思われる今の教育の現状の中、この映画を見ると「やれば出来るんだ」という気持ちがわいて来ます。明るい気持ちになります。

これまで12年にわたって映画を見ながら憲法について考えてきました。そして今、映画を通してわかったのは次のようなことです。

- ①「憲法第9条＝戦争の放棄」は、日本人だけでなく、世界の人々のいのちを守るためのものであるということ。
- ②日本国憲法の三つの原則は、すべて「ひと」が何より大切であることに基づいているということ

〈これまでの憲法映画祭の上映作品〉

憲法映画祭2016・・・・・・2016年5月1日
『映画 日本国憲法』『ありふれたファシズム』『ショック・ドクトリン』
憲法映画祭2017・・・・・・2017年4月29・30日
『意志の勝利』『白バラの祈り』『ゾフィー・ショル、最後の日々』『夜と霧』『顔のないヒトラーたち』『戦争をしない国 日本』『大東亜戦争』『天皇と軍隊』
憲法映画祭2018・・・・・・2018年4月29・30日
『すべての政府はウソをつく』『ニッポンの嘘』『東京裁判』『NO（ノー）』『ハトは泣いている』『トランプのアメリカ』
憲法映画祭2019・・・・・・2019年4月26日～28日
『あの日の声を探して』『天皇の名のもとに』『証言 侵略戦争』『陸軍前橋飛行場』『沖縄スパイ戦史』『ありふれたファシズム』『ショックドクトリン』『ベトナムから遠く離れて』『共犯者たち』
憲法映画祭2020 はコロナのため休止
憲法映画祭2021・・・・・・2021年4月17日
『戦争のつくりかた』『戦争をしない国 日本』『シャドー・ディール』『1987、ある闘いの真実』



憲法映画祭2022・・・・・・2022年4月23・24日
『グレッタひとりぼっちの挑戦』『ちむぐりさ』『私たちの生まれた島』『若きハルサーたちの唄』『バークレー市民がつくる町』『日本鬼子』『映画 日本国憲法』『コスタリカの奇跡』
憲法映画祭2023・・・・・・2023年4月29日30日
『はだしのゲン』『対馬丸』『うしろの正面だあれ』『少女ファニーと運命の旅』『ジョニーは戦場へ行った』『沖縄うりずんの雨』『教育と愛国』『ある戦争』
憲法映画祭2024・・・・・・2024年4月29日
『ヤジと民主主義』『してはら』『荒野に希望の灯をともし』『戦争のつくりかた』『サイレント・フォールアウト』『ミサイル基地がやってきた 島で生きる』

資料② 映画『禁じられた遊び』について

【映画の解説】

『禁じられた遊び』（原題: *Jeux Interdits*）は、1952年のフランスのドラマ映画。監督はルネ・クレマン、出演はブリジット・フォッセーとジョルジュ・ブージュリーなど。フランソワ・ボワイエの小説『*Les Jeux Inconnus*』を原作とし、戦争で孤児となった5歳のフランス人少女の運命を描いた映画である。

アカデミー賞名誉賞（後の外国語映画賞に当たる）、ヴェネツィア国際映画祭サン・マルコ金獅子賞などを受賞した。日本では、1953年のキネマ旬報外国映画ベスト1に、また同年のブルーリボン賞の外国作品賞に選出された。劇中の音楽は全編を通してナルシソ・イエペスがギター一本で演奏した。これにより「愛のロマンス」が広く知られることとなった（1941年の映画『血と砂』ですでに使われていた）。



【物語】

1940年6月、ドイツ軍から逃げるため街道を進む群衆の中に、幼女ポーレットがいた。そこに戦闘機による機銃掃射があり、彼女は一緒にいた両親と愛犬を失ってしまう。ポーレットは愛犬の死体を抱きながら川沿いの道を彷徨い、そこで牛追いをしていた農家の少年ミシェルと出会う。彼の家庭は貧しかったが、ポーレットが両親を亡くしていることを知り、彼女を温かく迎え入れる。ミシェルはポーレットに親近感を持ち、無垢なポーレットもミシェルを頼るようになる。

幼いポーレットは死というものがまだよく分からず、神への信仰や祈り方も知らなかった。ポーレットはミシェルから「死んだものはお墓を作るんだよ」と教えられ、愛犬の死体を人の来ない水車小屋に埋葬し、祈りをささげる。愛犬がひとりぼっちでかわいそうだったと思ったポーレットは、もっとたくさんのお墓を作ってやりたいと言い出す。ミシェルはその願いに応えてやりたくなり、モグラやヒヨコなど、様々な動物の死体を集めて、次々に墓を作っていく。二人の墓を作る遊びはエスカレートし、ついには、十字架を盗んで自分たちの墓にしようと思いつく。

そのころ、馬に蹴られて寝込んでいたミシェルの兄が亡くなり、ミシェルは父が用意した霊柩車から飾りの十字架を盗む。十字架が消えていることに父が気づいてミシェルを問い詰めると、ミシェルは隣人がやったのだと言い逃れをする。葬儀に参列したポーレットが教会にある美しい十字架を気に入ったので、ミシェルはその十字架も盗もうと教会を訪れるが、失敗して神父に追い返される。すると、それを聞いたポーレットは、ミシェルの兄が埋葬されている墓場にも十字架は沢山あると言い出す。ミシェルとポーレットは、爆撃で光る夜空の下、墓場から多くの十字架を盗みだして自分たちの墓地へと運ぶ。

ところが、墓参りに行った家族が、墓場が荒らされていることに気づいてしまう。ミシェルの父は、息子の十字架まで引き抜かれているのを目にして激昂し、それを隣人のせいだと思い込んで、隣人と取っ組み合いの喧嘩を始める。すると、そこに神父が現れ、十字架を盗んだのはミシェルであろうと明かす。彼はその場から逃げ出し、家出をする。水車小屋に隠れたミシェルは、盗んだ大小さまざまな十字架で美しく装飾した自分たちの墓地を、満足げに見つめていた。その夜、ミシェルはこっそりと家に戻り、自分たちの墓地がとても素敵になったとポーレットに伝える。

しかし翌朝、ミシェルがポーレットに墓地を見せようとした矢先に、警官が彼の家を訪ねてくる。父は、警官が来たのはミシェルが十字架を盗んだからだと思い込み、彼を見つけ出して十字架を隠した場所を聞き出そうとする。ところが、警官がやってきた本当の理由は、戦災孤児として申告していたポーレットを引き取って孤児院に入れる為だった。それまで口を割らなかったミシェルは慌てだし、十字架の場所を言うからポーレットを家に置いてくれと父に頼んで、十字架のありかを白状する。しかし、父は約束を破り、ポーレットの身請けの書類にサインをしてしまう。怒ったミシェルは家を飛び出して水車小屋へ走り、腹いせに十字架を次々に引き抜いて川に投げ捨てる。すべてを捨てたあと、ミシェルは車のエンジン音を耳にする。それはポーレットが連れて行かれる車の音だった。

ポーレットは多くの人であふれる駅に連れてこられる。修道女によって首から名札を下げられたポーレットは、この場所から動かずに待っているように言われて、その場に残される。ポーレットが一人きりになると、人ごみの中から「ミシェル！」と呼ぶ声が聞こえてくる。その声にハッとしたポーレットは涙して、ミシェルの名を叫びながら探しに行く。しかし人違いで、彼はいなかった。ポーレットはママとミシェルの名を泣き叫びながら走り出し、雑踏の中へと姿を消していく。



【制作スタッフ】

監督: ルネ・クレマン
脚本: ジャン・オーランシュ ピエール・ボト
ルネ・クレマン
原作: フランソワ・ボワイエ『*Les Jeux inconnus*』
製作: ポール・ジョリ
出演者: ブリジット・フォッセー（ポーレット）
ジョルジュ・ブージュリー（ミッシェル）
音楽 ナルシソ・イエペス
撮影 ロベール・ジュイヤール
編集 ロジャー・ドワイア
製作会社 Silver Films
配給 Les Films Corona
東和公開 1952年5月9日
フランス映画/フランス語/87分

（Wikipedia『禁じられた遊び』より転載）

資料③ 映画『ベアテの贈りもの』について

【作品の解説】

このドキュメンタリー映画は、ベアテ・シロタ・ゴードンがピアニストの亡き父レオ・シロタのレコードを保有する岩手県紫波町のあらえびす記念館を訪ねるところから始まる。ベアテ・シロタ・ゴードンこそが、男女平等を定めた日本国憲法第24条の生みの親だった。

昭和初期の日本で、彼女は、日本女性たちの抑圧された状況を目のあたりにして育ち（5～15歳）、大学は単独で米国へ、卒業後はタイム誌の外国部リサーチャーとなった。1945年8月、第二次世界大戦が終わり、彼女は1945年12月、GHQ民間人要員として日本へ赴任、大戦中、音信不通だった両親と会えた。そして1946年、六ヶ国語をこなす彼女は、日本国憲法草案委員として弱冠22歳で、歴史的に重要な法案を起草した。

映画は続いて、日本女性たちの活動に及び、「ベアテからの贈りもの」を受けた女性たちが、これまで男性の支配下だった社会に、次々と起こした変化が語られる。彼女達の地道な努力の結果の積み重ねが、記録フィルムとインタビューによって構成された後半は、女性史・昭和史として、現代に生きる人々へ多くの実績を語り伝え、そして受け継がれていくことを意図したものである。

（映画『ベアテの贈りもの』公式ホームページ
<http://www.beateg.com/index.html>より）

【ストーリー】

“リストの再来”と称されたピアニスト、レオ・シロタの娘として1923年ウィーンに生まれたベアテ・シロタ。作曲家山田耕筰が、父親のレオ・シロタを反ユダヤ主義の欧州から招き1928年に東京で演奏会、翌年彼は再来日し、1931年には、東京音楽学校（現・東京芸術大学）の教授に就任した。

5歳のベアテは両親と東京乃木坂に住み、1936年にはドイツ学校から、アメリカンスクールへ転校し、自身の家庭の自由な雰囲気とはかけ離れた、抑圧された日本の女性達の実態も見聞きする少女時代を過ごした。

そして15歳で米国のミルズカレッジへ進学、両親と離れて暮らし始めたが、1941年に日米開戦となり、両親との連絡・送金も途絶えた。

終戦1945年の12月、彼女はGHQ民間人要員を志願し来日し両親と会えた。翌年、日本国憲法の草案委員の一人に起用され人権小委員会に属し、日本女性の状況を知る彼女は、女性の地位向上に関して様々な条項を書いたが、その多くはGHQの委員会では削除された。然し、彼女が思いを込めた人権は第14条に残り、そして男女平等は第24条となった。翌年7月ベアテは両親と、GHQでベアテと同時期、日本語通訳であったジョセフ・ゴードンが待つNYへ帰国、1948年1月結婚、ベアテ・シロタ・ゴードンは、翻訳の仕事をしていた。1952年秋、ロックフェラー財団の援助で、日米の指導的立場の人物交流の第一陣として日本から市川房枝が渡米し、ベアテはその通訳を務めたが、日本国憲法との関わりは秘密だった。以後、彼女はジャパンソサエティ、アジアソサエティに属し、日本・アジアの芸術文化を米国に紹介し続けた。1946年11月憲法公布、日本初の女性の選挙権行使では、39人の女性議員が生まれ、労働省発足、婦人少年局長に山川菊栄が初代局長に選ばれた。

1947年、家父長制度が廃止、さらに教育基本法が施行され男女共学が実現。1980年には、高橋展子デンマーク大使が、国連婦人の10年の女子差別撤廃条約に署名、85年に批准、そして赤松婦人局長の下で男女雇用均等法の成立となった。国籍法の改正、家庭科の男女共修と進み、また、民間企業における男女同一賃金に関する裁判の一番敗訴に、支援の呼びかけも広がり、国連の委員会からの日本政府への勧告の反映もあり、二審で和解、賃金のみならず昇進も獲得。女性の視座を論じ、大学では「女性学」も誕生。



1999年、男女共同参画基本法も成立、女性たちの職業・活動分野も多面化した。国際的には緒方貞子国連難民高等弁務官の存在も注目された。

1993年TV番組「日本国憲法を生んだ密室の九日間」放映がきっかけとなり、ベアテは日本で講演を毎年行ってきた。この映画の最後に「日本の女性は心と精神が強い、みんなで頑張っで欲しい、明るい将来のために。私が草案した権利を生活に活かし世界の女性達のためにも働きかけてください」と彼女は期待を語っている。

【スタッフ／キャスト】

監督・脚本：藤原智子
企画：赤松良子 岩田喜美枝 落合良
撮影：海老根務
音楽：レオ・シロタ
照明：重田清三
編集：黒木宏
その他：大和史明 鈴木博 長沼俊文 山崎宏 青木摩利 宮崎絢子

キャスト：ベアテ・シロタ・ゴードン 野村晴一
原田冴子 池野ヒサ 中村玲子 前田薫
池田説子 富田玲子 山口みつ子 山口美代子
田中園子 赤松良子 宇野淑子 石原一子
植本真砂子 白藤栄子 西村かつみ 正路怜子
井上輝子 緒方貞子

製作 映画「ベアテの贈りもの」製作委員会
イメージブレン（日本映画新社）

映画『ベアテの贈りもの』の上映について

一般財団法人 女性労働協会
〒105-0014 東京都港区 2-27-8 VORT芝公園 8F
TEL : 02-3456-4410 FAX : 03-3456-4420
E-mail : kanri@jaaww.or.jp
ホームページ :
<https://www.jaaww.or.jp/public/beate/>

この作品の自主上映については、上記までお問合せ下さい

資料④ 映画『オン・ザ・ロード— 不屈の男 金大中』について

【映画の解説】

民主主義と平和の実現にすべてを懸けた政治家・金大中。拉致、軟禁、投獄、死刑判決、幾多の困難にその道を阻まれても決してあきらめなかった金大中を突き動かしたものは――

生誕100周年を迎えた、元韓国大統領・金大中（キム・デジュン）の生涯と政治家人生を本人の肉声や関係者のインタビュー、そして本邦初公開の映像を含む6,000時間に及ぶ膨大な映像資料を基に制作された画期的なドキュメンタリー映画。日本の植民地時代に全羅南道に生まれ海運会社を営み、朝鮮戦争を経て、政治家を志す。軍事政権下で何度も死の危険にさらされながらも信念を貫いたこの男の人生は、どんな映画よりもドラマティックでスリリング、そして感動的である。

激動の韓国現代史を映し出す鏡とも言える金大中の生き様こそ、個人の勇気を信念が、いかに国家の未来を変えうるかを示し、わたしたちが新しい時代を切り拓いていくための道標にほかならない。（映画『オン・ザ・ロード 不屈の男、金大中〜』公式ホームページIntroduction）

【映画を見ての感想から】

隣国、韓国の現代史をきちんと知りたいとずっと思っていました。金大中さんのことを始め、光州事件、1987民主化運動など、断片的な知識はあるのですが、整理された形で頭の中に入っていなかったということをこの映画を見てつくづく思いました。韓国の現代史は同時代を生きているはずなのに、何も分かっていなかった、と。

この映画を見て、金大中さんの政治家としての不屈の活動の歩みについてというだけでなく、韓国の民衆がどのように民主主義を勝ちとっていったのか、実感を持って知ることができました。そしてまた、自分たちを取り巻いている今の閉塞的な政治状況と合わせて、そこで何が大切なのかを考えるきっかけに出来る映画と思いました。

映画を見始めて、まず感じるのは、金大中さん自身が政治家を目指すようになっていく過程の語り口が、とても淡々として感情を交えない、ある意味では薄情と思えるほど客観的事実だけを並べている感じがすることです。いわば伝記映画の主人公なのですが、偉い人だったと褒め称えるようになることを、あえて抑制しようとしていることが伝わってきます。事実だけを見て、見る人が感じ取って欲しいという作り手のこの映画へのこだわり、姿勢を強く感じます。

この映画はまた、独裁政権、軍事政権というものが、どのようなものかを生々しく、切実に感じさせます。自分を脅かす政敵には、拉致、逮捕、拘禁、そして不正な裁判と、権力を駆使して追い詰め、殺害も辞さない、自分の政権を守るためには、法を都合よく変え、戒厳令によって鎮圧と称して軍による虐殺をもためらわず弾圧を続けます。韓国ではそうした独裁政治が李承晩、朴正熙、全斗煥政権の時代と合わせて40年間も続き、その中で金大中は政治家として民主化を訴え続けるのですが、自身はそれによって4度も死の恐怖を味わうことになるのです。その凄さ、苛酷さが古いニュースフィルムの映像から伝わってきます。

映画はまた、とくに後半、民衆が勝ち得た民主主義とはどういうものか、日本のような上から降ってきた「民主主義」ではなく、韓国の民主主義が、民衆が「命がけで勝ち取ったもの」であることをまざまざと見せつけてくれます。

そしてその中で、金大中という政治家がどのような役割を果たしていったのか、民衆の運動とともに歩んだ金大中がどのように強くなっていったのかが描かれます。

とくに強調されているのは、民衆とともに歩む、民衆の側に立つての政治をつらぬく信念です。彼の信念と確信は民衆に対する信頼にあったと言えることができるでしょう。



1980年、金大中の逮捕をきっかけに、民主主義の政治の実現を訴えた「光州事件」が起こります。その首謀者として死刑宣告を受けた金大中はアメリカに亡命、帰国後、自宅軟禁を解かれた後、光州を訪れます。その時に民衆の前で見せた彼の涙に全てが示されています。苦しみ悲しみを重ねた末、民衆とともに得た一体感です。

今、私たちも、予測不能な政治の動きに対して戸惑い、どうしたらよいかわからないという不安の中にいると言えます。そのことについて、この時期、この映画を作る中で知り得たこととして、ミン・ファンギ監督は次のように話しています。

「『金大中』の生涯を追っていくと、国民の民主主義に対する熱望、抑圧されてきた人々が自分たちの権利を主張し、より平等な世の中を作りたいという熱望が巨大な流れを作り、社会の変化を成し遂げたことを目撃することが出来ます。

金大中という政治家の成長は、民衆の絶対的な信頼と支持がなくては想像できないものでした。今では想像しがたいでしょうが、政治が未来へのビジョンを語り、それによって人々の熱望を引き出すことが出来た時代だったのです。この映画が大それたことができなかった、人々の心中の熱望は何か、望む世の中はどんなものなのか自らに質問し、そんな話を共有し討論できる仲間や、そのような政治家がいるのかを問うてみたいと思います。」（ミン・ファンギ監督インタビュー：映画パンフレットより）

「1台の車を売るより、1本の映画を売ろう!」、これは金大中大統領就任後のスローガンとして掲げたものだそうです。金大中さんが大統領であった時期に政策として映画製作への援助、振興、とくに人を育てることに力を入れたという話はすでに、前から聞いていました。そのおかげで私たちも上質な韓国の映画やドラマを楽しませてもらっています。同様に、金大中大統領の在任期間に、日本文化の開放が劇的に行われたので、この映画の監督自身もその時期に好きな日本映画を思う存分見ることが出来たことを感謝している、と語っています。そうした政策によって、それぞれの国で互いの国の、歴史や社会、文化についても随分イメージを豊かにもつことが出来ました。

隣国の人々と、文化の交流を通して国と国とのパイプを大きくしていこうという政策は、北朝鮮に対しての友好的な道を探った金大中の姿勢とも一致、共通するところがあるといえるでしょう。

文化の交流やそれぞれの生活を知ることを通して、どこが同じで、どこが違うか、違って面白いと思うし、同じなんだと思って親しみをを感じる、人としての共感や感動を味わうことが出来ます。私たちがもっともっと知り合うこと、その延長に「戦争をさせてはならない」という人々の力があることを、民主主義と平和の実現に全てをかけた政治家、金大中を描いたこの映画は教えてくれます。

（シネマde憲法2024年11月24日記事より転載

https://www.jicl.jp/articles/cinema_20241122.html）

映画『オン・ザ・ロード 不屈の男 金大中』の上映について
配給：株式会社スモモ

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前6-34-20-1F

電話：03-6450-5867 FAX：03-6450-5073

この作品の自主上映については、上記までお問合せ下さい

資料⑥ 金大中と韓国民主化の略年表

SOUTH KOREA (韓国)	Kim Dae-Jung (金大中)	JAPAN (日本)
	1924 1月6日 全羅南道の荷衣島に生まれる	
	1936 9月 家族とともに木浦府に転居し、木浦公立第一普通学校に編入	
	1939 4月 木浦商業高校に入学	
	1943 木浦商業高校を卒業	
	1945 日本敗戦／朝鮮解放	
	1946 車容愛（チャ・ヨンエ）氏と結婚	1946 日本国憲法の制定
	1947	1947 新憲法の施行
1948 済州島四三事件 8月15日 大韓民国樹立／ 李承晩、初代大統領に就任	1948	
	1949	
1952 釜山政治波動	1950 朝鮮戦争勃発	1951 サンフランシスコ講 和条約・日米安全保障 条約
1953 休戦協定	1951	1953 奄美諸島が日本復帰
	1952	1954 第5福竜丸の乗組員が 被爆
	1953	1955 「55年体制」の始まり
1960 3.15不正選挙で再選した李承晩「4.19革命」で失脚 朴正熙による 軍事クーデター	1954 第3代民議院議員選挙に木浦から出馬するも落選 選挙に落選	1956 日ソ共同宣言調印／ 国際連合加盟
	1959 選挙に落選／車容愛夫人が病死	1960 安保闘争
	1960 第5代民議院議員補欠選挙に出馬し、初当選。しかし3日後に朴正熙による 軍事クーデター（五・一六クーデター） が発生し、国会は解散した。	
	1961 李姫鎬（イ・ヒホ）氏と再婚	
	1962 第6代国会議員選挙に木浦から出馬し、当選	1964 東京オリンピック
	1963	
1966 朴正熙政権発足	1964	
	1965 6月 日韓基本条約締結	
	1966	
	1967 2月 新民党結成。第7代国会議員選挙に木浦から出馬し、当選。	
	1968	1968 全共闘運動
1969 朴正熙、再び大統領選に出馬	1969 9月 新民党の党大会で第7代大統領候補に指名される	
	1970 第7代大統領選挙に出馬	1970 初の日本万国博
1971 金泳三が「40代旗手論」を唱える	1971 現職の朴正熙に95万票差にまで迫ったが、落選。	1972 日中共同声明調印／ 沖縄返還
	1972	
	1973 金大中拉致事件	1976 ロッキード事件
1976 朴正熙暗殺未遂事件（文世光事件）	1974 反維新闘争団体「民主回復国民会議」に参加	
1978 朴正熙暗殺 ／全斗煥による軍事クーデター	1975 3月「民主急告宣言」を発表した後、逮捕され 1978年まで収監	1978 日中友好条約調印
	1978 3月 仮釈放されるも自宅軟禁が続く。	
	1979 10月26日 朴正熙暗殺事件 発生。民主化の気運が高まり「ソウルの春」が訪れ、韓国政界で金大中、金泳三・金鍾泌の3人のリーダーが注目される。「民主主義と民族統一のための国民連合」を結成し、共同議長に選ばれる。	
	1980 光州事件 2月29日 政治活動を再開するも、3ヶ月後の1980年5月18日に再び逮捕。これが原因と成り光州で起きた民主化要求のデモを軍部が武力弾圧する、光州民主化抗争（光州事件）が発生	
1981 全斗煥政権発足	1981 「内乱陰謀事件」の首謀者などとして死刑宣告を受ける	
	1982 1月23日 閣議決定により無期懲役に減刑 12月23日に米国への出国を条件に刑の執行が停止。 米国に亡命（2度目の亡命）	1985 プラザ合意
	1983 米国で「在米韓国人権問題研究所」を設立	
	1985 2月8日に亡命先の米国からの帰国を強行。 自宅軟禁に置かれたが、その後、全斗煥大統領により政治活動を解禁される。	
1987 6月 民主抗争	「民主化推進協議会」の共同議長に就任。 再び公民権を回復。「平和民主党」を結成。 党大会で総裁と第13代大統領候補に選出されるも、落選。	
	1998 第15代韓国大統領（～2003年）	
	2000 6月 平壤で金正日と南北首脳会談。6.15南北共同宣言 韓国人初のノーベル平和賞	
	2009 8月死去	

映画パンフレットより転載
岩波書店「金大中自伝Ⅰ・Ⅱ」小学館「日本大百科全書」などを参考に作成

資料⑥ 映画『夢みる校長先生』について

【監督メッセージ】

『夢みる校長先生』の前作『夢みる小学校』の自主上映会が全国で爆発的に開催されています。いつまでも変わらない公教育に対する多くの市民からの異議申し立てだと感じます。

でもね。
“子どもファーストを夢みる校長たち”がいることをこの映画で知ってほしいのです。

「子どもの権利条約」日本で制定された「子ども基本法」
小中学生の人権について考え直しませんか。

「先生」くらい素敵な職業はない、って僕は思います。
夢みる先生たちを応援して公教育をアップデートしていきましょう。

教育の主権者は、子どもたちと私たち市民です。
全国の校長先生、市民のみなさん、もっと、夢をみよう！

【映画の解説】

『夢みる小学校（完結編）』

文部科学省の学習指導要領が2020年度から「探求学習」に大きく舵を切りました。

30年前から「探求学習」を実践している先進的な学校があります。テストがない、「先生」がいない、「きのくに子どもの村学園」。キラキラした目で授業を受ける小・中学生の姿を見たことがありますか？学校って、本当はこんなにわくわくする場所だったのです。

「学校教育」の認識が180度変わる“衝撃の楽しい授業風景”をご覧ください。（『夢見る小学校（完結編）』ホームページ「イントロダクション」より）

『夢見る校長先生』

文部科学省選定映画『夢みる小学校』の公立ヴァージョンができました！

今作はすべて「ふつうの公立学校」が舞台です。9人のユニークな夢みる校長たちが「子どもファーストな学校改革」を大公開。

公立学校もこんなに自由だったんですね！（『夢みる校長先生』ホームページ「イントロダクション」より）

【スタッフ／キャスト】

『夢みる校長先生』

監督：オオタヴィン

出演：尾木直樹（教育評論家）

前川喜平（元文部科学省事務次官）

国分一哉（神奈川県茅ヶ崎市立香川小学校校長）

西郷孝彦（東京都世田谷区立桜ヶ丘中学校校長）

住田昌治（神奈川県横浜市立日枝小学校校長）

原口真一（栃木県日光市立足尾中学校校長）

宮崎倉太郎（東京都武蔵野市立境南小学校校長）

福田弘彦（長野県伊那市立伊那小学校校長）

ナレーター：小泉今日子

制作・まほろばスタジオ

配給・宣伝：きろくびと

（2023年／日本／82分／カラー）

映画『夢みる校長先生』の上映について

まほろばスタジオ事務局

<https://dreaming-teacher.jp/form/>

この作品の自主上映については、上記までお問合せ下さい



【『夢みる小学校』『夢みる校長先生』を見て感想】

この映画『夢みる小学校（完結編）』がすばらしいのは、ここで小学校生活を送った、ユニークな教育を受けた子どもたちが、中学生になってどうなったか、どのようにここでの「自由さ」を受けとめて、現在の自分の考え方を作っているのか、その教育の成果を、自分たちの言葉で、しっかりと話しているところです。

聞いていて感心しますし、自分も、こう言う教育を受けていればなあ、と、ここでの教育を納得させられるものがあります。

しかしどうしても、良いことばかり見せられると、ここは特別じゃない、恵まれてるからいいけど、などと鼻白んでしまう気持ちになるのは、管理教育ばかり受けて来た私たちの「いじけ」でしょうか。「こういうことは私学だからできるんでしょ」「公立の学校の先生だって、子どもたち第一に考えてがんばってるんです。それを教育委員会や文部省がどんどん管理していくんじゃないですか」、と。

そこでスピノフ的につくられたのが映画『夢みる校長先生』だそうです。

ここでは公立学校に限って、自由な教育をいくつか達成した、あるいはそれをもう何十年も続けている校長先生が紹介されます。通知表の廃止、校則ゼロ、宿題だって無くすことが出来る、など校長先生自らが言い出して、それを実行したものです。子どもたちを減入らせてきた「きまり」を無くしてきたご機嫌な学校をいくつかの事例から紹介しています。

そしてこんなことも、あんなことも「やれば出来る」という明るい気持ちにさせられるのです。

この映画を、私たちは4月29日の憲法映画祭の上映作品としました。憲法を考えていく中で、「やればできるんだ」と言う気持ちを広げていからです。「ダメだ」と思って、考えること自体をあきらめてしまわないように、それも自分たちの身の回りのことから考えて、「やればできる」と励ましていこう、そんな願いを込めています。

『夢みる校長先生』のエンディングテーマは、RCサクセションの『すべてはALRIGHT』。

その歌詞です。「この国の憲法9条を知っているかい。戦争はしない。戦争に加担しない。愛と平和なんだ。まるでジョンレノンの歌みたいじゃないか。政治に無関心でいいなんて言っていると、君の息子なんか戦争に行っちゃうわけよ。いいかい、気をつけろよ。だまされんなよ。自分を見失わないで欲しいんだ。」（『夢みる子どもたち』パンフレットより）

この映画の監督のオオタヴィンさんが一連のドキュメンタリーでの描きかたったものが見えてくるようです。

（シネマde憲法 2025年2月21日より転載
https://www.jicl.jp/articles/cinema_20250221.html）



第80回「憲法を考える映画の会」は、2025年3月20日午後、文京区民センターで行い、参加者95人でした。

上映作品は『ガザからの報告「第一部 ある家族の25年」「第二部 民衆とハマス」』3時間25分の長時間の上映でしたがたくさんの方に参加いただきました。

映画の後、監督の土井敏邦さんとお話の時に意見や質問と、参加者の皆さんからいただいた参加票の感想を転載させていただきます。

【映画の後の土井さんのお話と質疑（要約）】

土井さん「この映画を見て二つのことを感じて欲しい。一つは第一部、映画を見て、そこに生きている人間の顔を見て、自分たちと同じ、生きている人を感じてほしい。そしてニュースなどでパレスチナのことを聞いたとき、そこに生きる人の痛みを感じてほしい。

ふたつ目は、とくに第二部。パレスチナとハマスは別だと言うこと。ハマスによっても民衆も苦しんでいる、苦しんでいるのは民衆だと言うことを考えてほしい。

Q. オスロ合意が共同の解決法だったと思うが。

A. オスロ合意は「占領の合法化」に過ぎなかった。イスラエルは、5年後にイスラエル国家を作る気など無かった。イスラエルは今も西岸地区や、ガザの行政権、警察権を握っていてイスラエルの入植者を送り込み、入植者を兵士、警察に守らせ、抵抗するパレスチナ人を抑え込んでいる。

Q. トランプの提案、パレスチナ人をアメリカ人にする案は？

A. イスラエルはパレスチナ人を追い出すことしか考えていないし、周辺国だって受け入れない。何より人間にとって、土地や故郷とは何か、トランプは何も分かっていない。

Q. オスロ合意がだめ、ならどのような解決法があるのか？

A. 解決が何かについては誰も答えられない。ヨルダン川西岸、ガザの解放が最も良いのだから現実的でない。それなら併合されて自治というのが、現実的だと思うが、人間としての尊厳が取り戻されなければ解放はない。

Q. 2003年のハマスの攻撃があるとイスラエルは分かっていたのではないかな？

A. 明らかにイスラエル諜報機関のミスと思う。意図的になどと考えるのは、イスラエル人のメンタリティを理解していない。イスラエルは「第2のホロコースト」と世論を作り上げて、ホロコーストを止めるためには何をやっても良いという空気を国全体に作った。

Q. 民衆の視点が大事だという考えに共感。メディアは正しく伝えていない。ではどうしたら良いのか。それでも身の回りから社会を変えていくことが。

A. ハマスは民衆の声を伝えていないばかりか、メディアに対しても危険。民衆は「（ハマスに）何てことをしてくれたんだ」とに思っている。社会を変えるというのは大きなことだが、私は映画を通して、ガザのことを伝え、それを知った上で、これから自分がどう生きていくのか、みなさんひとりひとりが考えて関わって欲しいと思う。



【参加票に寄せられたコメント】

●テレビニュースで、短くしか知ることのなかった、パレスチナガザの内面を少しでもと思って来たが、良く理解するための一歩となった。(Y.I.)

●「ニッポニア、ニッポン」（なるべく早い時間帯で）字幕が上部にあればいいなあと、いつも思います。(K.Y.)

●土井さんのお話に感銘をうけました。
“故郷”や“家族”のこと、「私の鏡として」との土井さんの言葉を映像の中のエルアクラ家の方々の言葉と同じものとして心に刻みました。

「オスロ合意」を教科書で学びましたが、エルアクラ家のお父さんは、即座に、違う!!とおっしゃっていました。故郷に残した土、家のことを思えば当然でしょう。自分は何を失ったのか、この映画で、改めて、つきつけられたと思います。(H.A.)

●23年10月7日、ハマスのイスラエル攻撃はテロ、イスラエルや米欧の主張とは土井さんの話しは意味内容は全く違う、認識があらたまりました。

映画リクエスト

「Rebolution + 1」をお願いします。(Y.I.)

●今回の映画を観て、パレスチナ問題を自分ごととして考える一つのきっかけとなりました。

土井監督のお話がとても良かったです。現場を知るかただけができる説得力のある内容でした。ありがとうございました。(M.T.)

●人権を犯されているドキュメンタリー(I.I.)

●土井さんの息の長い取材があればこそ知ることができたことが沢山あって観て良かったです。権力があつという間に腐敗していくことに絶望した。(A.O.)

●10・7以前のガザについてこんなに明確に教えてくれる映画を観たことがなかった。とても考えさせられました。(M.S.)

●今まで見たガザの映画より、今回の映画が一番ガザの現実を見せてくれました。(無記名)

●希望が失われる経過が苦しくてつらい！
他の国のはなしではないですね。(T.M.)

●アップリンク吉祥寺で何本か観たのですが、「ガザからの報告」は是非見逃がしたくなかった。(Y.O.)

資料⑦ 第80回憲法を考える映画の会（2024/3/20）参加者感想から（2）

●ガザ地区の住民は、今どのような生活をされているのだろうと思っていました。今日、映画を観て、仕事のない壁の中の生活が、今、さらにイスラエルからの砲撃でもう、悲劇です。

いつの世も苦しむのは一般市民…本当にそう思います。世界が何とかしてあげられないのでしょうか。危険の中、このような記録映画をとって下さってありがとうございます。(M.I.)

●（個人の都合で第2部からの視聴です。）

ほんとうに悩ましいです。パレスチナのためにどうしたらいいのか、わかりません。丸腰の人々がどれだけ死んだらいいのでしょうか。

無力な人間ですが、忘れないでいる事しかできません。

民衆の視点、心に留めます。

「ハマスへの怒り」という視点、新鮮でした。(Y.O.)

●とても良い映画でした。紛争地での人権について考えさせられました。

現在、日本における難民の支援団体で、活動しております。難民認定率が世界と比べても低い日本において、とてもきびしい状況です。映画の最後に一番の損失は人間の価値観、倫理観が失われたこと…とありました。

とても心に残る言葉でした。(N.O.)

●テレビのニュースでは分からないことが、このドキュメンタリー映画で知ることができた。一家の父が語る「故郷を忘れない」「自分は帰れなくても、後の子孫が帰れるという希望を持って生きている。」「今はイスラエル、その後ろにいる米国が強いから帰れなくても、強国もいつか滅ぶ」が印象的であった。民主主義も絶対ではなくぜい弱だ。パレスチナ自治政府、パレスチナ警察が、大衆と対立することを知った。(S.S.)

●実際の映像を見られてとても勉強になりました。(K.M.)

●。ガザの人々も、日本人と変わらない。家族や友人との関係を大切に、仕事や教育のことで悩む同じ人間であることを実感できてとても有意義でした。

。ハマスが出てきたのも、イスラエルの占領に根本的な原因があるのではないかと疑問を否定できないので、ハマスの一連の行動をどうみるべきかについて。私自身は今のところ、結論が出ていません。ただパレスチナの民衆が一枚岩になっている訳ではなくて、ハマスの批判が根強くあることを知り、それと向き合わなければならないと思いました。(A.K.)

●日本から遠く離れたガザのことを私はあまりに知らない。知識としてのイスラエル建国、中東戦争のさわりをなぞっただけで、他は何も知らない。

しかし日本はかつてイスラエルのように略奪、侵略を繰り返し、ハマスのように奇襲をしかけた。民衆はただ嘆き、悲しみ、苦しみ、そしてすべてを失う。国、地域、時代は変われど同じ過ちを人類は犯す。バカモノ為政者どもよ、その愚かさを知れ！(K.N.)

●直視できない場面が多かったです。子供達の泣く顔、うえて無表情の顔。…死んで行った人々。

これはユダヤ人のほうふくなのか。被害者が加害者に転じたのか？宗教の問題なのか？神が戦争をやらせるのか？人を殺させるのか？

パレスチナ人は食糧も飲水もないのに、イスラエル人は広大なハウスで観葉植物を育てている。自動で灌水されている。私はパレスチナのオリーブ油を買い、イスラエルのイチゴは買わない。こんな事しかできない。(M.S.)

●悲劇が身に迫って感じられました。

パレスチナ内で様々な問題があり人々が苦しんでいることが解った。

ハマスがイスラエルへ抵抗する正義の戦いの一端を行っていると誤解していたことが間違いであることに目が開かれる思いであった。民衆の視点から見ることで。

どうすればこの攻撃を終らせることができるのか？(A.Y.)

●3月20日第一部「ある家族の25年」について思うこと。

アメリカの従属国である日本に暮らす人々がパレスチナに対して言えることではないが、男・男・男…。見るからに屈強な男が髭をたくわえ、いかにも強さをアピールしすぎ。

女性の役割は食事の支度、洗濯等画面に現れる同数の女性が見えてこない。撮り手が男性だからか？決定権の半数は男女同性にしないと争いが絶えないと思う。（日本も同じ軍事に頼ろうとしている）。

男性が多くの決定権を持ち、僅かな女性を加われば、その女性は非情になる（男性より）。日本の2018年の法務大臣川上陽子氏は13名をも絞死刑のサインをした。その後直ぐに赤坂自民亭で酒盛り。信じられない。

。可愛い子どもも男の赤ちゃんも20年経れば髭をたくわえた勇しい男性になるのか？と思うと暗くなる。撮映・編集はモンタージュのつなぎなので撮手(?)でいかようにもなる。観た瞬間から観た受け手に移る。戦中戦後の日本のように貧乏人の子沢山を想像してしまう。

。画面をもう少し上にしないと人の頭で字幕が見えない。

。人は環境によって「けだもの」にもなれば「紳士淑女」にもなる。

。結婚が人生にとって最良の事とは思えない。

。子供を持つことも最良の事とは思えない。

。キリスト教における神はユダヤ教の神と同一。

イエスは神の子とされている。

イスラム教も神は同じ。

ユダヤ人はイエスを処刑した民族でもある。

イエス自身もユダヤ教徒（つまりユダヤ人）

。ユダヤ、キリスト、イスラム 啓典の宗教とは距離を置く日本は西側世界とは違う提案を示せると思う。

。世界は皆兄弟姉妹と思えないだろうか？(F.O.)

●テレビでは見ていますがあらためて現実の映像を見せて頂きありがとうございました。（無記名）

●内情が良くわかって良かったです（ほぼ知らないの）。

●この30年間のガザの様子を垣間見ることが出来ました。誤解していたこと、知らなかったことが沢山ありました。PLO、ハマスが権力を握ってからの変質が特に心に突きささりました。何故人間は理想を持っていても変わってしまうのか。

最後のパレスチナジャーナリストの叫び「戦争が全てを破壊した」が全てを語っていると思います。特に子どもたちの今、将来が本当に心配です。

とにかく早くパレスチナの人々に安全と通常の生活が戻ってくることを祈ります。（無記名）

●資料P6、P7、P8の関係映画の多さと、パレスチナへの無知を思い知らされました。映画会で上映していただくとありがたいです。報道されないガザの現状を今日見られ、胸苦しく、じっくり考えねば…

下高井戸シネマで「津島」を拝見。感動した先週でした。

(無記名)

資料③ 憲法を考える映画の会（関連映画会）上映作品一覧（1）

- 第1回 2013年4月06日
『戦争をしない国 日本』
- 第2回 2013年5月19日
『八十七歳の青春 市川房枝生涯を語る』
- 第3回 2013年6月15日
『映画 日本国憲法』
- 第4回 2013年7月06日
『日本国憲法誕生』
- 第5回 2013年8月10日
『日本の青空』
- 第6回 2013年9月14日
『ヘアテの贈りもの』
- 第7回 2013年11月02日
『ショック・ドクトリン』
- 第8回 2013年11月30日
『レーン・宮沢事件』
- 第9回 2014年1月18日
『ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳』
- 第10回 2014年2月08日・3月01日
『“私”を生きる』
- 第11回 2014年4月12日
『9条を抱きしめて』
- 第12回 2014年5月24日
『死んだらヒマはない 益永スミコ86歳』
- 第1回ちいさな映画会 2014年6月21日
『ラブ沖縄』
- 第13回 2014年7月19日
『ファルージャ イラク戦争 日本人質事件…そして』
- 第2回ちいさな映画会 2014年8月17日
『僕たちは見た／沈黙を破る』
- 第14回 2014年9月21日
『ありふれたファシズム 野獣たちのバラード』
- 第3回ちいさな映画会 2014年10月4日
『速報辺野古の闘い 2014年8月／アルマジロ』
- 第4回ちいさな映画会 2015年2月1日
『スペシャリスト／わが青春に悔なし』
- 第16回 2015年3月14日
『証言 侵略戦争』／『証言 中国人強制連行』
- 第17回 2015年4月25日
『イラク 戦場からの告発』／『ジャーハダ イラク民衆の闘い』『シリア内戦 イスラム国の正体を暴く』
- 第18回 2015年6月13日
『井上ひさし 九条を語る』／『加藤周一 九条を語る』
- 『女性達にとっての日本国憲法』
- 第19回 2015年7月18日
『東京裁判』
- 第5回ちいさな映画会 2015年8月23日
『弁護士布施辰治』／『天皇の名のもとに』
- 第20回 2015年9月13日
『誰も知らない基地のこと』
- 第21回 2015年10月25日
『首相官邸の前で』
- 第22回 2015年11月28日
『ハーツ・アンド・マインズ ベトナム戦争の真実』
- 第23回 2016年1月31日
『白バラの祈り ゾフィー・ショル、最後の日々』
- 第24回 2016年3月26日
『グラニート 独裁者を追い詰める』
- 第25回 憲法映画祭 2016年5月01日
『映画 日本国憲法』／『ありふれたファシズム』／『ショック・ドクトリン』
- 第26回 2016年6月26日
『ザ・思いやり』
- 第27回 2016年7月24日
『ハトは泣いている 時代（とき）の肖像』
- 第28回 2016年9月17日
『焼け跡から生まれた憲法草案』
- 第29回 2016年10月15日
『NO（ノー）』
- 第30回 2016年11月03日
『わたしの自由について SEALDs 2015』
- 第6回 ちいさな映画会 2016年12月10日
『抗い ARAGAI』『横浜事件を生きて』
- 第31回 2017年1月29日
『横浜事件を生きて』『横浜事件 半世紀の問い』
- 第32回 2017年2月25日
『小林多喜二』
- 第33回 2017年3月26日
『武器なき闘い』
- 第34回 憲法映画祭2017 2017年4月29・30日
『意志の勝利』『白バラの祈り』『夜と霧』
『顔のないヒトラーたち』『戦争をしない国 日本』
『大東亜戦争』『天皇と軍隊』
- 第35回 2017年5月27日
『知事抹殺の真実』
- 第36回 2017年7月01日
『テロリストは誰？』
- 第37回 2017年8月27日
『戦ふ兵隊』『日本の悲劇』
- 第38回 2017年10月14日
『隠された爪跡』『払い下げられた朝鮮人』
- 第39回 2017年12月10日
『ジョン・ラーベ 南京のシンドラ』
- 第40回 2018年1月27日
『憲法を武器として 恵庭事件 50年目の真実』
- 第41回 2018年2月25日
『ザ・思いやりパート2 希望と行動 編』
- 第42回 憲法映画祭 2018年4月29・30日
『すべての政府はウソをつく』『ニッポンの嘘』
『東京裁判』『NO（ノー）』『ハトは泣いている』『トランプのアメリカ』
- 第43回 2018年6月3日・30日
『500年 権力者を裁くのは誰か』
『グラニート 独裁者を追い詰める』
- 第44回 2018年8月25日
『在日』
- 第45回 2018年9月23日
『スペシャリスト 自覚なき殺戮者』
- 第46回 2018年11月03日
『OKINAWA1965』
- 第47回 2018年12月08日
『南京！南京！』
- 第48回 2019年1月27日
『わたしの描きたいこと』
- 第49回 2019年3月02日
『天から落ちてきた男』
- 第50回 憲法映画祭 2019年4月26日～28日
『あの日の声を探して』『天皇の名のもとに』
『証言侵略戦争』『陸軍前橋飛行場』
『沖縄スパイ戦史』『ありふれたファシズム』
『ショックドクトリン』『ベトナムから遠く離れて』
『共犯者たち』
- 自主制作映画見本市 #1 2019年4月30日
『死んだらヒマはない』『私の描きたいこと』
『ハトは泣いている』『隠された爪跡』
『OKINAWA1975』『知事抹殺の真実』
『フクシマ2011』
- 第51回 2019年6月30日
『沖縄から叫ぶ 戦争の時代』『宮古島からのSOS』
- 第7回 憲法を考えるちいさな映画会 2019年7月14日
『言わねばならないこと』『遅すぎた聖断』

資料③ 憲法を考える映画の会（関連映画会）上映作品一覧（2）

- 第52回 2019年8月10日
『ピカドン』『ひろしま』
自主制作映画見本市 # 2 2019年9月23日
『在日』『証言 中国人強制連行』『レーン・宮沢事件』／
『ファルージャ』『シロウオ』
『生きるのに理由はあるの』
特別講演会 2019年10月22日
「現代天皇制の心の支配」山田朗先生『遅すぎた聖断』
第53回 2019年10月26日
『ニジノキセキ』
特別上映会 2019年11月03日
『靖国・地霊・天皇』『遠近を抱えて PART 2』
第54回 2019年12月08日
『主戦場』
自主制作映画見本市 # 3 2020年1月13日
『陸軍前橋飛行場』『靖国・地霊・天皇』
『憲法を武器として』『9条を抱きしめて』
『裁判所前の男』『選挙が生まれる』
第55回 2020年2月11日
『アフガニスタン 用水路が運ぶ恵みと平和』
第56回 2020年9月21日
『沖縄と本土 一緒に闘う』『ヤジと民主主義』
自主制作映画見本市 # 4 2020年9月26日
『ヒロシマナガサキ最後の二重被爆者』
『私たちは忘れない』『二つの故郷を生きる』『棘』
『人らしく生きよう』『生きるのに理由はあるの』
第57回 2020年11月03日
『地の塩』
特別上映会 2020年11月23日
『人らしく生きよう 国鉄冬物語』
自主制作映画見本市 # 5 2021年2月23日
『天皇の名のもとに』『グラニート』『ザ・思いやり』
『チェルノブイリハート』
第58回 2021年3月27日
『言わねばならないこと』『ショック・ドクトリン』
第59回 憲法映画祭2021 2021年4月17日
『戦争のつくりかた』『戦争をしない国日本』
『シャドー・ディール』『1987、ある闘いの真実』
第60回 2021年6月06日
『ハワイマレー沖海戦』『ドキュメント真珠湾攻撃』
『ミッドウェイ海戦』
第61回 2021年8月08日
『荒野に希望の灯をともし』
自主制作映画見本市 # 6 2021年9月26日
『外国人収容所の闇』『君が代不起立』
『終わりの見えない闘い』『闇に消されてなるものか』
第62回 2021年11月21日
『子どもたちの昭和史』
自主制作映画見本市 # 7 2021年12月26日
『原発の町を追われて』『パークレー市民がつくる町』
『日高線と生きる』『作兵衛さんと日本を掘る』
『いのちの海』
第63回 2022年2月06日
『標的』
第1回ちいさな映画会@中野 2022年2月20日
『命(ぬち)かじり 森口諭沖繩と生きる』
『沖縄 暑い長い青春』『激突死』
自主制作映画見本市 # 8 2022年3月13日
『傍観者あるいは偶然のテロリスト』『海辺の彼女たち』
『ウィッシュマ・サンダマリ』『オキュパイシャンティ』
『メトロレディーブルース』
第64回 憲法映画祭 2022年4月23日・24日
『グレタ ひとりぼっちの挑戦』『ちむぐりさ』
『私たちの生まれた島』『若きハルサーたちの唄』
『パークレー市民がつくる町』『日本鬼子』
『映画日本国憲法』『コスタリカの奇跡』
第1回 憲法と市政を考える会@立川 2022年5月01日
『戦争をしない国日本』『戦争のつくりかた』
『コスタリカの奇跡』『パークレー市民がつくる町』
『町の政治 ぺんきょうするお母さん』
第1回憲法を考える映画の会@国分寺 2022年5月15日
『荒野に希望の灯をともし』
第2回 ちいさな映画会@中野2022年6月12日
『シバサシ 安里清信の残照』
第8回 憲法を考えるちいさな映画会 2022年6月25日
『ヒトラー VS チャップリン終わりなき闘い』
『チャップリンの独裁者』
第2回憲法を考える映画の会@国分寺 2022年7月17日
『闇に消されてなるものか 写真家樋口健二の世界』
第65回 2022年8月13日
『TOMORROW 明日』
自主制作映画見本市 # 9 2022年9月18日
『2887』『ワタシタチハニンゲンダ!』『葫蘆島遣送』
『岸边の杓』
第66回 2022年10月23日
『教育と愛国』
第67回 2022年12月25日
『日本原 牛と人の大地』
第68回 2023年2月12日
『テロリストは誰?』
第69回 憲法映画祭 2023年4月29日30日
『はだしのゲン』『対馬丸』『うしろの正面だあれ』
『少女ファニーと運命の旅』『ジョニーは戦場へ行った』
『沖縄うりずんの雨』『教育と愛国』『ある戦争』
第70回 2023年7月16日
『ドキュメント石垣島』
『沖縄、再び戦場へ(仮) スピンオフ作品』
第71回 2023年8月6日
『広島・長崎における原子爆弾の影響』
第72回 2023年10月21日
『鶴彬 こころの軌跡』
第73回 2023年12月23日
『流血の記録 砂川』
第74回 2024年2月3日
『サイレント・フォールアウト』
第75回 憲法映画祭2024 2024年4月29日
『ヤジと民主主義』『しではら』
『荒野に希望の灯をともし』『戦争のつくりかた』
『ミサイル基地がやってきた 島で生きる』
『サイレント・フォールアウト』
第76回 2024年6月29日
『アトミック・カフェ』
第77回 2024年8月11日
『生きていてよかった』『千羽鶴』
第78回 2024年10月14日
『琉球弧を戦場にするな』
第79回 2025年1月12日
『映画 〇月〇日、区長になる女。』
第80回 2025年3月20日
『ガザからの報告』
第81回 憲法映画祭2025 2025年4月29日
『禁じられた遊び』『ペアテの贈りもの』
『オン・ザ・ロード 不屈の男 金大中』
『夢みる校長先生』

* ここにあげた「これまでに上映した映画」は、一部に海外に著作権があるものや、その期限が切れてしまっているものもありますが、おむね上映の可能性のあるものです。上映会をお考えの方はどうぞお声がけください。

資料⑨ 憲法を考える映画の会の活動

資料⑥ 憲法を考える映画の会の活動（2）

〈大切にしたいこと〉

この12年間で、80回の上映会（定例の憲法を考える映画の会）、8回の公開試写会（憲法を考えるちいさな映画の会）9回の自主制作・上映映画見本市、5回の地域別上映会（中野、国分寺、立川）3回の特別上映会を行ってきました。（P.10、P.11の「憲法を考える映画の会（関連映画会）上映作品一覧」をご覧ください。）

そうした中で1回目の上映会から大切にしてきたことがあります。今回はそのそれらについてご紹介させていただきます。

■トークシェア

映画を見終えた後、それぞれが映画を見て話し合う機会を出るだけ持たせたいと、この「トークシェア」を始めました。映画の感想を出し合うことをきっかけに、今それぞれが考えていること、気になっていることを出し合うという形で話が進みます。最近では、映画の制作者や関係者に來てもらって質問に答えてもらう形が多くなっています。

また参加した人には上映会の参加票に感想や意見を書いてもらって、それを次の会の資料として共有します。

ひとりひとりが、それぞれ考えることを出し合い、そして他の人の言っていることに耳を傾けていく機会をつくること大切と考えています。

■手元資料

映画の中身や映画が描いていること、あるいはその提起している問題などについて考えていくのに役立てばと毎回参加者に渡す「手元資料」という小冊子を作っています。

上映した映画の説明や、映画の中で描かれている事件の背景を知るための資料（年表や地図、用語の解説や同じようなテーマを描いた映画や書籍・参考書の紹介）を作って、映画会の参加者に見てもらっています。1回1回の映画会の記録の役割も果たしています。

■自主制作・自主上映映画

社会的に主張のある映画を自主制作で作っていくことは容易ではありません。上映館で上映され多くの人に見られる機会が少ないのが現状でしょう。

こうした映画を多くの人に見ていただくとともに、作り手の皆さんが、映画をさらに作り続けていけるように、自主上映し、出来るだけ広く紹介して行きたいと思っています。（これもP.10、P.11の「自主制作上映映画見本市」あるいは右欄の「関連上映会」の作品などをご覧ください）

■あちこちで「憲法を考える映画の会」を

私たちはこの映画会が、市民運動のように広がっていることを夢めています。映画を通して、社会や政治を考える場があちこちにでき、考える輪が広がってほしいなと思っています。そのために「憲法を考える映画のリスト」を作って、憲法について考えていくのに優れた役に立つ映画を紹介してきました。またこの「憲法を考える映画の会」の案内チラシや「手元資料」などもそれぞれの上映会でも利用してもらうなど、お手伝い、協力できればと思っています。どうぞよろしく。

来年の映画祭、武蔵野公会堂は工事に入ります

今回の「憲法映画祭」の会場の武蔵野公会堂は、来年は改築、改装工事のために休館になり「憲法映画祭」の会場に出来なくなります。新しい会場が決まりましたらご案内させていただきますので、是非ご連絡先をお知らせください。とくに今回映画祭がはじめての方は資料に挟んである「参加票」にメールアドレス、住所をお書きください。

資料⑩ これからの憲法を考える映画の会 （あとおいニュース 第50号）

第82回 憲法を考える映画の会

と き：2025年6月28日（土）13：30～16：30

ところ：文京区民センター3A会議室

（地下鉄春日駅・後樂園駅）

プログラム：（未定）

第12回 むのたけじ反戦塾

と き：2025年5月24日（土）

13時30分～17時（13時開場）

ところ：文京区民センター3C会議室

（地下鉄春日駅・後樂園駅）

「むのたけじ反戦塾」は、むのたけじさんが遺した「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」の反戦と憲法の講演の映像と一緒に見て、今、当面している問題について意見を出し合っていく学習会です。

これまで11回の学習会を行い、その成果をまとめている所です。8月にその発表を兼ねた拡大学習会を予定しています。

*問合せ先：090-4599-5314 武野

〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201

E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp 武野

関連上映会&催し案内

現代造形表現作家フォーラム展

と き：2024年5月4日（日）～5月10日（土）7日休館

ところ：東京都美術館ギャラリーA（上野駅徒歩7分）

本展ではますます混迷に向かう現代に対し、「人間を問う」という視点で23作家が真摯に向き合います。

5月3日（土・休）～5日（月・休）連日10:30～

第30回メイシネマ祭2025年

3日『映画 〇月〇日、区長になる女』『骨を掘る男』

『山里は持続可能な世界だった』

『トノバン 音楽家加藤和彦とその時代』

4日『うんこと死体の復讐』『絶唱浪曲ストーリー』

『モアナ 南海の歓喜』『よみがえる声』

5日『記録・授業「人間について」』『江里はみんなと生きていく』

『アメイジング・グレイス アレサ・フランクリン』

『かづあめ』（小松川区民館ホール＝総武線平井駅）

5月3日（休・土）13時～ 未来は変えられる！戦争ではなく平和な暮らし！2025憲法大集会（5/3 11:00～ ミニステージ、13:00～ メインステージ 東京・江東区 有明防災公園）

5月4日（日）～10日 9時半～ 九条美術の会「第14回 守ろう 生かそう 憲法九条 九条美術展」（5/4～5/10 東京都美術館）

5月4日（日）14時～ 『憲法を武器として』第66回文京上映会（文京区民センター＝後樂園駅）

5月7日（水）19時～ 第128回 VIDEO ACT! 上映会～『拝啓 住民投票さま』完成記念上映会（東京ボランティア・市民活動センター＝飯田橋駅）